
メリー

東雲咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メリー

【著者名】

Z7597E

【作者名】

東雲咲夜

【あらすじ】

「こんにちは、私メリー」ある日、俺のところに一通のへんてこなメールが来た。

『こんにちわ。私はメリー。こんばんわ』

ある日、俺の元に一通のヘンテコなメールが届いた。
もちろん俺の知り合いにメリーなんていう名前的人はない。
いや、そもそも外国人がない。

俺はあまり親しい人以外にアドレスは教えない。面倒だからだ。
今までにも迷惑メールは数知れず来ていたが、こんなタイプのものは初めてだつた。

気持ちが悪い半分、なんだかおもしろそうな気もする。
試しに、俺はそのメールに返信してみることにした。

ちなみに、メールアドレスもドメイン名の前にメリーと表示されていた。

『こんにちわ。いや、こんばんはか？　俺はタクミ。俺に何かの用
？』

……こんなもんかな。タクミっていうのは、俺の偽名。
あ、別に怪しいことしてるわけじゃないよ。ネットでのハンドル
ネームだ。

さすがに、見ず知らずの相手に本名を教えるほど馬鹿じゃない。
それに、ちゃんと毎回相手ごとにハンドルネームは変えてある。
タクヤとか、コウヤとか、ユウジとか色々。
送信してから、数分後。すぐに返信メールが来た。

『こんにちわタクミ。タクミは今何しているのかなって思ったの
何をしているかって？　わけの分からない人とメール中だよ。
無論、そんなことはメールに書かない。書いたら、やばいもんな。
今はね、パソコンを使って仕事していたんだよ。そしたらメール

が来た』

『 そうなの。あのね、タクミ、タクミ。聞きたいことがあるんだけど
どいい?』

へえ。聞きたいことね。偽のプロフィールでも教えてみようか
な。

プロフィールなんものは、いくらでも捏造できるからな。簡単
で助かるよ。

ちなみに俺は昔、偽名と偽プロフィールでネット上で恋愛したこ
とがある。

もつとも、恋愛と zwar ても、ほとんど「うひー」に近かったけど。
しかもその遊びの今の俺の彼女にバレて、終わりを迎えた。
彩華あやかは嫉妬深いんだ。

『 いいよ。俺に何が聞きたいの?』

送信と書かれたボタンをマウスでクリックする。

手紙が飛んでいくモーションと共に、この世界の何処かにいる「
メリーハー」という人の所へメールが送信された。

数分待つてみたが、メールはすぐ返つてこなかつた。

はあ。それにしても俺も物好きだよな……

迷惑メールに返信する、なんて変な事をするなんて。
律儀に返信して来た相手も珍しいけど。

だつて、人生色んなことがあるんだ。刺激的なこともたくさん。
真面目な優等生君一本じや、もつたいなさすぎる。

ぼや〜んと考えていると、ピロンシとこう原始的なメロディが聞
こえた。

俺はたいていメールが来ても気づかないから。

携帯電話のように音が鳴るよつに設定してある。

早速来たメールを開いてみた。

『ねえ、タクミ。あなたウソついているでしょ？』

背筋が、ゾクリとした。

確かに俺は偽名を使っている。

どうしてそれがわかるのだろうか。嘘をついてるかどうかなんて、メールの文章から何とでも読み取れる。でも、やっぱり本当のことを言わると不気味だ。

それ以前に、メールの内容が噛み合っていないんだけど。質問はあるかと送ったのに、いきなり嘘ついてるかなんて。なんだか嫌だな。

でも よく考えろ。

この俺がメールをしている相手は、こうしたことが好きなのかかもしれない。

相手のことを搖さぶらせて、楽しむよつな。愉快犯つていつやつ? もしもやうなら、ここで俺が変な反応を見せたら、相手の想つツボだよな。

カマをかけているに違いない、そう判断した俺は早速メールを返信した。

『嘘? 僕は嘘なんてついていないよ。正真正銘のタクミだよ』

正真正銘の名前は、洗夜なんだけどね。

よく考えると、全然似てもいないな。むしろかけ離れている。

ボタンをクリックしながら、俺はあくびをひとつ吐いた。

ウインドウの隅に表示されている時計を見ると、午前一時半ちょうど。

そろそろ眠くなつてくる時間帯だ。次のメールで今日はもう終わりにしようか。

『そう？ それならいいけれど。私はもう寝るわね。おやすみなさい、タクミ』

そんなメールが返ってきた。やつぱりカマをかけていたんだな。おやすみ、と簡単な挨拶をして、俺はノートパソコンを閉じた。

次の日、俺は散らかった部屋の片づけをしていた。

散らばるゴミや雑誌などをゴミ袋へと詰め込んでいく。

本当ならば掃除機でもかけたい所だが、このマンションは神経質な住人が多い。

うつかり騒音を立てると、すぐに苦情がくる。その割には、周りは結構うるさいんだが。

彩華が来るときはいつも掃除をしないといけないんだ。綺麗好きなんだ、あいは。

だから俺はゴミ取りのローラーでカー・ペットを掃除中。

テーブルの上の時計を見ると、十時。まだ結構早い時間だ。

でも、そろそろ彩華が来るかもしれないな。何でも、お昼より前の午前中には来るらしい。

何だその中途半端な時間は。

散乱していたゴミもあらかた片付け終わり、俺はノートパソコンを開いた。

例のメリーからメールは来ているのだろうか。

ソフトを起動して、送受信を行う。

一通だけ、新しいメールが来ていた。タイトルは、無題。

『おはようタク!!。今日はとってもいい天気ね。何か予定はあるの?
?』

なんだかすゞく平凡な内容の気がする。

昨日のメールが不気味に感じたのは、深夜だつたせいなんだろうか。

メリーが住んでいるところも天気はこうつだ。俺のマンションからも、晴天が見える。

『おはようメリー。今日はね、俺の家には彼女がくるんだよ。羨ましい? なんてね』

『彼女? タクミには彼女がいるのね。いいわね。私にもいるけれど浮気してばっかりなの』

へえ。この不得体の知れないメリーにも、ちゃんと彼氏はいるらしい。

一応一人の人間なのだろうから、当たり前といえば当たり前なんだけど。

浮気 か。俺みたいに、浮気好きなやつが相手だと大変だよな。

『浮気ばっかりしてるんだ、ひどいね。あ、だから君も俺とメールしてるとか?』

『ああ、浮気返しつていうことかしら? それも面白いかもしねないわね』

いやつて相手してみると、別にメリーも普通の人みたいだ。暇つぶしの相手にはちょうどいいかもしねない。

『『だつて、相手がしてるんなら君もしなきや。もつたいないだらう？』』

？』

『『やられたらやりかえすのね。じゃあ、タクミの彼女はしてくるの？』』

『『いや、してないよ。してるのは、俺だけ。樂しまないともつたないからな』』

『『ふうん。タクミはそういう考え方の人なのね』』

ああ やつぱり見ず知らずの他人とのメールは面白い。
自分とはまったく違う価値観を持つた人と話ができるなんて。
インターネットは画期的だな。

次はどんな話を振ろうかと考えていたとき……
少し大きめなインターネットホンの音が響いた。
あ、彩華のことをすっかり忘れていた。
ノートパソコンを閉じて、ドアの鍵をはずす。

「ちょっと、洗夜あ！ 鳴らしたらすぐ鍵開けてよね～」

「悪い悪い。ちょっとパソコンやつててさ」

ドアを開けると、彩華が仁王立ちになっていた。

肩の辺りまでまっすぐに伸びた、さらさらの茶髪。

少し切れ長の瞳は黒。顔の形はシャープだ。声は少し高い。
性格は嫉妬深くて、わがまま。すぐに疑心暗鬼に陥るタイプ。
けつこう危なつかしいんだ、色んな意味で。

テーブルの前に移動した彩華がパソコンを見ながらいつ。

「何やつてたの？」

「ん？ メール

「誰と？」

メリーサン、と俺はいながらお茶をテーブルの上に置いた。
一応彼女にも言つておいたほうがいいのかな。

「メリーサンって、あれ？ ほら怖いやつ」

メリーサン。誰でも一度は聞いたことがある話。
電話がかかってきて、「私メリーサン」といつ話。
道端で人形を拾つ話。

「なんでそういう考え方になるんだよ。

なんか、迷惑メール送つてきた相手の名前がメリーサンだ」「
へー。物好きなんだね。で、男、それとも女？」「
少し尖つた言い方で質問された。怪しまれてるな。
そんなのメールしたぐらじやわからないって……まあ、どう考
えても女だろうけど。

しかし、ここで女と云ふとまたつるたこだらうから

「さあ？ なんだかオカマっぽいよ」

何それ、と彼女が笑う。

「それよりさーもうお皿なんだけ。お腹空いたやつだ

「あーなんか食べに行こつか？」「

「なんで？ 洗夜つて料理じよつずでしょ」

「だから、今冷蔵庫の中何も無いんだってば」「

「しようがないな」

数分後、俺はぶつぶついう彩華を部屋から連れ出すことに成功し
た。

とつあえずマンションからお出で遠くはないデパートへ来た。
せつかく外出したんだから、お店で食べればいいと言つたんだけど……彩華がどうにも粘つて。

店じやなくて俺の手料理をどうしても食べたいらしー。

俺としては喜べばいいのかなんなのか。作るのは正直こって面倒なんだよな。

俺の隣では彩華が野菜を物色している。

バー「コードやら、産地やらこうこうと細かくチェックしてこる。やっぱり神経質なんだろうか。

俺はといえば、ほとんどこう所では荷物持ちに近いものがある。

ぶつちやけ、食材なんて食べられればいいこと。なおかつ安いとグッズだ。

たぶん、そんなこというと彩華に殴られるけど。

「なあ、この後どうするんだ？ 帰つてお風にするのか？」

「ん？ この後は普通の買い物しようよ」

ちょっと待て。俺に重い食材を持たせたままなのか。けつこうつきつないか、それって。

レジへ向かう彩華の後についていきながら抗議をしてみる。

「それさ、俺が結構大変だと思わない？ 食材つて結構重いんだけど」

「何言つてんの。男でしょ」

男がみんな力持ちだと思つていてるんだろうか……

ほら、といつまにか会計を済ませていたらしく、みつしつと詰

まつた袋を三つ渡された。

なんだか明日筋肉痛になりそうだよ、まったく。

ひいひい言いながら歩く俺の前を軽やかに進んでいく彩華。

けつこうなスピードで進んでいるらしい。見る見る内に距離が開いてしまった。

「な、なんでそんなに急ぐんだよ？ 店はまだ閉まらないって

「あたしは贈り物はゆっくり選びたいんだよ~」

贈り物？ なんか友達にでもあげるんだろうか？

きょとんとしたまま歩く俺を見かねたのか、

「ちょっと、まだ寝ぼけてるの？ 明日は洗夜の誕生日でしょうが、

まつたく

「俺の誕生日。」

あ そういうえば明後日は俺の誕生日だったような……『仮』がする
ようなしないような。

正直、あんまり男にとって誕生日って大事じゃないからつる覚え
だ。

まあ。彩華がそういうんだから、たぶんそつなんだりつ。それで
いいのか、とも微かに思うけどね。

「どういじとは、俺になにかくれるのか？」

「もうよ。今まで散々な目に合わされたからね……浮氣する暇ない
ようなものあげるわ」

ふつふつふとちゅうと黒い笑顔だ。 一体何を贈られるんだろう
か、俺。

「ひとつおきのプレゼント用意するんだから。楽しみにしてよね
？」

「ああ。とりあえず楽しみにしとくよ」

「あー！ 何よその投げやりな言い方は～」

今にも頭から角を生やしそうな彩華を抑えながら回りを見渡して
みた。

あんまり人前で痴話喧嘩とつのも恥ずかしいからな
ん？ あれは

「おい、彩華。あれってお前のお姉さんじゃないか？」

俺はウイングを眺めている一人の女性を指差した。なんとなく
見覚えがある。というか似ている。

「はぐらかすつもり？ 姉さんは今日は学校よ。 いろんなところに
るはず……」

ないでしょ？ と続けようとした口が途中で止まった。

どうやら、正解だつたらしい。

そのまま彩華はその女性へと駆け寄つていった。

「姉さんじゃない。こんな所で何してるの？ 学校は？」

「えつー!?

いきなり声を掛けられてかなり驚いている。いや、当たり前だよな。

「おー、彩華、いきなり質問攻めにするなよ

「あ……洗夜さん。こんなにあは

「あ、どうも」

彩華の双子の姉の鈴華さん。
れいか

少し短めの髪は、艶々とした綺麗な黒髪。瞳も綺麗な黒色。性格も、おてんばな彩華とは違つて、おしとやかでおとなしい。実は、結構俺のタイプだつたりする。

彩華は仕事をしているが、鈴華さんは専門学生らしい。なんでもコンピューター関連の勉強をしているらしい。すげいよな。

「今日は学校はね、午前中だけだつたの

「へえ～それで買い物に来てるんだ?」

「そうよ。びっくりさせないで……」

向かい合つて話している一人だが、かなりそつくり。いや、一卵性らしいから、当たり前なのかもしれないが。それで性格がまったく違うのもおもしろいなと思つ。

「彩華は……デート?」

「デートなんかじゃないつて、ただの買い物だよ」

「そうなの。確か、明日は洗夜さんの誕生日だからてつきつ……」

「お、姉さんよく知つてるね」

ほう。いちおうこれがデートじゃないつていう直覚はあるんだな。俺、今情けない格好だしな。両手に葉っぱがはみ出た袋を持つてるし。

「どうか そろそろ腕が限界なんだが。

「なあ、彩華。そろそろ帰らないか? 荷物が重くて……」

「男のくせに力ないんだから。頑張ってよね」

「頑張った結果なんだが。せめて休憩でもしないか……?」

はあ、とため息をつく彩華を見ながら鈴華さんが少し笑った。

「洗夜さんも疲れているみたいだし……休んできたらどう?」

「何よ~姉さんもヘナチョコ男の味方あ?」

「そういうわけじゃなくて。私もそろそろ買い物に戻りたいし」「うーん、それもそうだな……」

しばらく悩むそぶりをした後、彩華は俺の傍へと戻ってきた。
たぶん、お腹が空いたんだろう。

「休憩するのはいいけど、おごりね?」

俺の財布が寂しいことになりそうだった

「はあ……疲れた」

俺が部屋に戻つてこれたのは、夜の十一時。

あの後なんだかんだで彩華に引っ張りまわされたのだ。

ファンシーショップとか、フルーツバーとか、喫茶店とか。

同時に甘いものもたくさん食べさせられた。

よつて、今軽く胸焼けしている。といふか気持ち悪いです。

冷蔵庫のお茶をラップ飲みした後、ノートパソコンを開いてみる。

またメリーカラメールは来ているんだろうか。

ソフトを起動すると、メールは一通来ていた。

どちらも送り主はメリーとなつていた。

その一通目を開いてみた。

本文には、空白しかなかつた。

妙に思つて、そのままスクロールしてみた。

一枚の写真があつた。

俺は、その写真を見つめたまま、目を見開いていた。

写真に写っているのは、俺と彩華。

これは 今日の買い物の写真……

何で？

まず俺の頭に浮かんだのは、その言葉だった。

何故、どうしてこの写真がメリーから送られてくる？
これは考えれば簡単なこと。

メリーが、俺たちにとつて身近な人だということ。
いや。身近というよりは、近くに住んでいると云ひことだらうか。
でも……

俺がタクミだとはわからないはずだ。

問題はメリーが誰なのか。

というか、今日会ったのは彩華と鈴華さんしかいないんだけど。
彩華は……全然興味なさそうだな。

というか彼女はパソコンを持っていない。

このドメイン名はパソコンだけにしかないものだ。

鈴華さんは論外だらう。

よく知らないけど。

いや、まさかという可能性も……

でもこんなことする意味がわからないし。

軽く混乱している頭を抱えたまま、もう一通のメールを開いてみ
た。

『こんばんわタクミ。写真、気に入つてもらえたかしら？』

『メリー、君は俺の事を知つていてるのかい？』

『ええ。タクミのことなら何でも知つてるわ。明日誕生日だつてこ
とも』

なんでメリーが俺の誕生日を知つていてる？

それとも、これもまた性質の悪い悪戯なんだろうか。

『ねえ。はつたりは良くないよ? 遊びたいのはわかるけど……』

『はつたりなんかじゃないわ。タクミの本当の名前だつて知ってるわ

『本当? それじゃあ教えてよ』

『あなたは タクヤ』

『あなたは ユウヤ』

『あなたは ユウジ』

『あなたは カイト』

『あなたは シオン』

違う。

それは違う。

それは俺が今まで使っていたハンドルネームだ。

それは……俺の偽名であつて本名じゃない!

気がつくと、ノートパソコンには、たくさんのメールが来ていた。
メールではなく、チャットをしているかのような勢いで。

『ねえ、間違つていないでしょ? タクミ』

『私、最初にウソついてるでしょ? うりでいつたんだもの』

『タクミがウソをついていたのね』

『うふふ……どれがあなたの本当の名前なのかしら?』

『ねえ どうして 反事をしてくれないの? タクミ』

『タクミ、 明田誕生日なのよね、 おたんじょうび』

『私、 とつておきのプレゼントを用意しているの。 楽しみにしてね?』

『私が、 あなたの誕生日をお祝いしてあげるわ 言葉で……ね』

俺は。 俺は怖くなつてノートパソコンを閉じた。

まだ、 メリーからのメールは受信され続けているのだろうか。
怖い。 自分の誕生日が怖いなんて 初めてだ。

俺は憂鬱な気分で眠りへとついた。

誕生日当日。

俺は早めに起きたが、 頭はメリーのことでいっぱいだった。
あいつは ここにくるんだろうか?

俺はそのときどうするべきなのか。

一人で悶々と悩んでいると、 部屋のインター ホンがなつた。
びくびくしながら、 のぞき穴を見ると、 そこには彩華がいた。
ほつと安心しながら、 ドアを開けた。

「もつ、 開けるのが遅いよつ 洗夜~!」

「悪い悪い。 寝ぼけててさ

俺はちらちらとホールパソコンを横目で見ながら答える。
今にもメリーカから狂気じみたメールが来るのじゃないかと、かな
り気が気じゃない。

「パソコンなんて見てないでよ~」

ぶつくさいいながら、勝手に上がりこんでテーブルの前に座った。
よく見ると、彩華は腕に何かを抱えている。

細長い形の箱を、ピンク色の包装紙で包んであるみたいだ。
赤いかわいらしいリボンで巻かれてある。

「彩華……それが贈り物？」

にこにこと何が楽しいのか、笑いながら彩華は答えた。

「そうだよ。とつておきのプレゼントなんだから

「へえ~高級品とか？」

俺も半分ふざけながら問いかける。

「う~ん。あたしが、見えなくなるものかな?」

「彩華の下着とか？」

つ……冗談なのに……殴るなんてヒドイ

「ちゃんとね、リボンに名前のシールも貼つてもうたんだから」「
女つて、人に贈り物するのが好きなんだな……なんていうか、輝
いてるよ、ああ。

頭の中で今日のお昼をじつじようかな　と考えていた。
ちゃんと食材は買つてある。

外食にじようといったが、一緒に料理を作りたいらしい。
何料理、と聞いたら、肉料理、といつていた。

あ……俺肉買い忘れたかもしけないんだけどな。

「なあ、早く見せてくれ

俺が彩華の持つ箱に触ろうとしたとき。

インターホンが鳴った

思わず、びくつと肩が跳ねてしまう。

「一体 誰だ?
まさか……メリー?
どうせ元気ですよ。」

俺はドアの方へと向かつていった。

覗いてみると、そこには

鈴華さんがいた。

「鈴……華さん?」

「いきなり驚かせちゃつたかしら?」

「いえ、平氣ですけどどうして……」

「今日洗夜さん、誕生日でしちゃう? 私からもプレゼントしようか
なつて」

「何だ。

俺が過剰に怯えすぎていただけじゃないか。

きつとあれは性質の悪い悪戯だつたんだ。

そう、ただの イタズラ。

「ちょっと待つてくださいね、今開けますから……」

俺がドアのチャーンを外そうとしているとき、背後から彩華の声が
聞こえた。

「誰?」

「ん? 鈴華さん。祝いにきてくれたんだつてさ」

「そう 」

再びドアを開けようとしたとき、俺の足元にひらりとリボンが落ちてきた。

後ろで彩華がガサゴソ音をたててている。

プレゼントを渡そうとしているのだろうか。

リボンを良く見ると、金色のシールが貼られていた。

拾い上げてよく見ると、そこには名前が書いてあった。

書かれている名前を頭が理解する前に。

背後から、再び彩華の声がした。

「お誕生日おめでとう、タク!!。私からのお祝いをあげるわ

どこかで見たことのある名前。

どこかで見たことのある口調。

振り返りうとしたとき。

腹部に鈍い痛みを感じていた。

腹部を見ると、何が包丁のよつなものが突き刺さっていた。
そして、俺の目の前にいたのは

メリーでも何でもない、確かに俺の彼女の彩華だった。

俺は力が抜けてゆっくりと崩れ落ちていく。
腹部は痛いというよりも熱かった。

微かに、鈴華さんの声が聞こえたような気がした。
変だな。そんなに離れていないはずなのに。
でも、俺の耳には彩華の声しか聞こえなかつた。

「ねえ……」これで洗夜はあたししか見ないよね？　あたししか愛されないよね？」

何か声を出さうとするが、氣だるくて、口を開くのも億劫だった。

「タクミは洗えて、洗夜だけになる。」それで、あたしのもの」

クスクスと笑い続ける彩華。いや

「お誕生日おめでとう。」これが、あたしと『メリー』からのプレゼントよ」

薄れゆく意識の中、メリーはずつとずつと笑い続けていた

私はチャーンを外して、ドアを開けた。

田の前には、姉さん……いや、赤の他人がいた。

「ここにちは。私メリー。あなたを殺してもいい？」

(後書き)

久しぶりの小説です……ぶっちゃけリハビリです。
どうでしょうか、ホラー？でしたか！？

これは、かの有名なメリーサンから連想ですね。
でも、怖くないですか？

包丁が丁寧にラッピングしてあるのって。
最高で、最悪のプレゼント。

皆さん、迷惑メールにはお気をつけくださいね。
感想などお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7597e/>

メリー

2010年10月8日15時54分発行